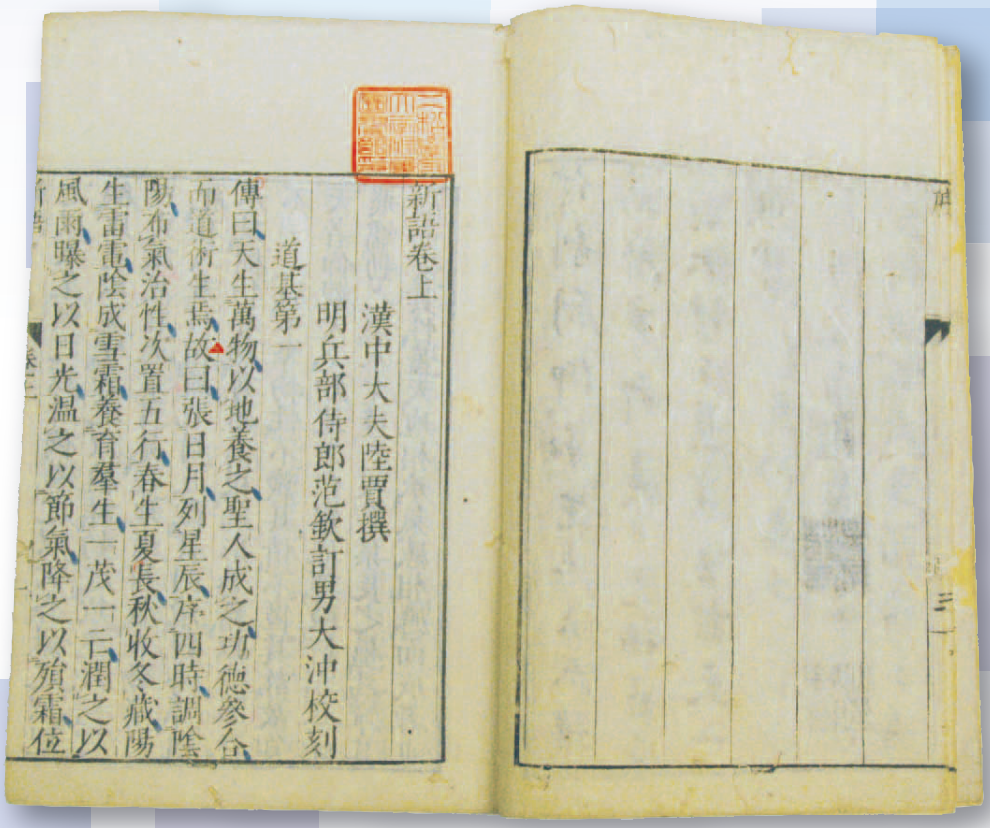
季報

二松学舎大学附属図書館
quarterly report



陸賈 撰 范欽 校　井上蘭臺 點『新語』(当館所蔵)

目次

P2　加藤常賢先生「維軒文庫」　野間文史

P3　『聖書』の世界を知るために　多田一臣

P4　中庸において考え続けること　手賀裕輔

P5　『外国語の水曜日 ―学習法としての言語学入門―』
黒田龍之介 著(現代書館)　西川雅子

P6　新スタッフ紹介／新しいデータベースのご紹介

P7　「文庫・新書架」はどこにある？

P8　図書館だより

No.89
2014(平成26)年
7月

加藤常賢先生「維軒文庫」

文学部　中国文学科　特別招聘教授　野間　文史

この４月から本学の特別招聘教授として文学部中国文学科に赴任した野間文史（のま　ふみちか）と申します。専門は中国古代中世思想史、もう少し具体的にいいますと、経書すなわち五経（周易・尚書・毛詩・礼経・春秋）とその注釈書「五経正義」を中心に研究してきました。

この４月・５月は授業の準備に追われ、本学の図書館を充分に探検？する余裕が無かったのですが、B２階の書庫を瞥見しただけでも、その充実ぶりは私の予想をはるかに超えていました。「四庫全書」を始めとする大型叢書がほとんど揃っており（「国学基本叢書」の全体を見たのは初めての体験でした）、専門書も明治以来現在の新刊本に至るまでのほぼ全てを見ることができます。ちなみに私はこれまで11冊の極めて専門的な書物を上梓しましたが、ISBNの付いていない自費出版本の１冊を除いた10冊が所蔵されているのを目の当たりにし、心より感激したところです。

ところで私は前任校（広島大学文学部）を退職する年（平成23年度）に、私の研究室に所蔵している漢籍（線装本）の整理調査を依頼しました。この作業を独力担当したのは当時文学研究科特別研究員であった赤迫照子氏（現宇部工業高等専門学校准教授）で、氏はその成果を逐次発表してきたのですが、その最初のものを「廣島大學所藏漢籍目録　經部」として、私の主宰する雑誌『東洋古典學研究』第31集（2011）に掲載してもらいました。

私はこの目録の付録として、「全国漢籍データベース」では検索されないか、あるいは極めて稀な書物について、簡単な紹介をしています。その原稿を書くためにいろいろと調査した際、注意を引かれたことが一つ有りました。それは広島大学以外では、本学図書館だけが所蔵する書物が少なからず存在するということです。

なぜこういうことがあり得るのか。果たしてこれは偶然なのか。その答えは簡単に出てきます。広島大学と二松學舍大学とを結んでいるのは実に加藤常賢先生（1894-1978）にほかなりません。

加藤先生は昭和８年（1933）から22年（1947）まで広島文理科大学倫理学科の教授として在任され、この間に、『支那古代家族制度研究』（岩波書店　1940）や『禮の起源と其發達』（中文館書店　1943）を著し、東京大学へ転出後には『眞古文尚書集釋』（明治書院　1964）を公刊されました。そして東京大学を御退官の後、二松學舍大学の学長を務められたこと（1962-75）、その蔵書が「維軒文庫」として本学図書館に所蔵されていることは皆様ご承知のことであります。

そしてここからは私の推測ですが、加藤先生はこれはと思う書物に出会われると、大学に購入すると同時に、御自身の蔵書としても購入されたのではないか。その1部が広島大学に、もう1部が「維軒文庫」に残されているのではないか、ということです。

そのことを拙稿「廣島大學所藏漢籍目録經部簡介」で指摘した書物は以下の通りです。

○周禮故書疏證六卷儀禮古今疏證二卷　清宋世犖撰
　光緒六年津門徐士鑾補刊本　确山所著書之一
○儀禮瑣辨一卷　清常增撰
　道光二十七年子存恭跋刊本一冊

また、
○釋親廣義二十五卷　清呉卓信撰　鈔本　一〇冊
　は広島大学以外では、静嘉堂文庫が所蔵するのみのもので、「史部」傳記類・姓名之属の、

○姓氏辯誤　三十卷　清張澍撰　棗華書屋刊本
○姓氏尋源　四十五卷　清張澍撰
　道光十八年棗華書屋刊本　一二冊

とともに、加藤先生が中国古代家族制度研究のために、科学研究費の交付を受けて広島文理科大学に購入されたものです。いずれも「全国漢籍データベース」には見えない稀覯書と申せましょう。

さて私の恩師池田末利教授（1910-2000）は、加藤先生の広島文理科大学時代の受業生でありました。縁有って私が本学に職を奉じることになったのも、あるいは恩師のお引き合わせであったのかもしれません。いずれ余裕が生じたなら、「加藤常賢先生維軒文庫」をじっくり拝見したいと、今から楽しみにしています。

『聖書』の世界を知るために

文学部　国文学科　特別招聘教授　多田　一臣

もう十五年も前のことになるが、文部省の長期在外研究員として、ドイツに滞在したことがある。お世話になったのは、ボッフム（Bochum）のルール大学である。日本では、ボーフムと表記されることが多いが、現地の発音では、ボッフムに聞こえる。ルール工業地帯の真ん中で、デュッセルドルフにも近い。

ドイツ語がまったくできず、片言の英語だけで一年近くを過ごしたのだが、それで何とか生活できたことが、いま考えると嘘のように思われる。大学の宿舎近くに大きなスーパーマーケットがあって、そこで日常の買い物は済ませていたが、一度、言葉が出来ないために、ひどい目にあったことがある。そこのスーパーは、野菜などは量り売りで、自動秤に自分で品物を載せ、品名のキーを押すと、重さに応じて値段を記したシールが出てくる仕組みになっていた。ある時、ナスを買おうと思ったのだが、ナスのドイツ語名がわからず、宿舎に戻って和独辞典を引き、そこにあったEierpflanzeという言葉を覚えてスーパーに戻ったら、その品名がキーのどこにもなく、買うことができずにあきらめて帰ったことがあった。後でドイツ人に尋ねたところ、ドイツ語のナスはたしかにEierpflanze（英語のeggplantと同語）だが、そんな言葉はいまは誰も使わない。フランス語のAuberginеのドイツ語読み、オーベルギーネを使っているという話を聞いて、ひどく驚くとともに、実に腹が立った。和独辞典の編者は、Aubergineはフランス語であって、ドイツ語ではないから、載せなかったということなのだろう。しかし、使う人のいない言葉を載せて、皆が使っている言葉を、外国語起源ゆえに載せないというのは、ずいぶんと愚かなことである。編者の杓子定規な頭に、いささかあきれ果てたことであった。

長々と書いたが、ここまでが実は前置きになる。ドイツ滞在中に、オペラを五十回以上も観て回った。もともとドイツに行く目的の半分はオペラを観ることだったから、ドイツ国内のあちこち、またウィーンやパリ、ロンドンあたりにまで足を伸ばした。

そこで、つくづく思ったのは、キリスト教世界に対する素養をまったく欠いている、ということだった。もっと具体的にいうと、『聖書』とりわけ『旧約聖書』の知識がなければ、オペラにかぎらず、ヨーロッパ世界の文化の本質を知ることができない、ということだった。ヨーロッパのオペラの最前線は、演出の時代ということもあり、賛否両論が分かれるような過激な舞台がしばしば見られるが、そうした新しい演出でも、キリスト教の世界像を前提としているものが少なくない。この滞在中、ワグナーの『パルジファル』を二度、バイロイト（その後突然亡くなったシノーポリの指揮）とドレスデンで観たが、その時は、クンドリーという謎の女の存在が、マグダラのマリアを象っていることに、まったく気づかなかった。「聖杯」伝説そのものは、何となく知っていて、美術館などで、キリストの磔刑図を見ると、右脇腹の傷から出た血を、天使が杯で受けているものがあって、なるほどこれが「聖杯」かと思ったりしていた。もっとも、磔刑図にもいろいろあり、右脇腹の傷を描かないものもかなり見られ、なぜそうした違いが生ずるのか、いまだにわからずにいる。クンドリーについていえば、三年前、エストニアのタリンで、三度目の『パルジファル』を観た時は、『聖書』の知識が多少はあったので、パルジファル（pure and foolの意）の足を洗う場面がなぜあるのかを理解することができた。マグダラのマリアが、キリストの足を洗い、長い髪でそれを拭い、香油を塗ったことに重ねているのである。

ここで、『聖書』の世界を簡便に知ることのできるトンデモ本を紹介しておく。中丸明『絵画で読む聖書』（新潮文庫）である。トンデモ本と書いたのは、登場人物の会話が、すべて名古屋弁で記されているからである。たとえば、モーセが率いた出エジプトの苦難の旅の途中に、マナという不思議な食べ物が出てくるのだが、それを味わった人びとは、「めちゃんこ、美味（うみや）ーあだでかんわ」などと言ったりする。

しかし、存外真面目な本で、主要場面を描いた様々な絵画（印刷は粗末）とともに、『聖書』の世界を早わかりのように、しかも面白おかしく紹介してくれている。『聖書』は、殺人、不倫、近親相姦などの話、あるいはきわめて不合理な話に満ち満ちていて、私のような不信心者は、そこにいたく興味を覚えるのだが、この本は面倒な解釈には一切立ち入らない。あくまでも不信心者の目線で、内容だけを紹介してくれているので、それがまことにありがたい。たとえば「イサクの供犠」など、どう考えてもひどい話としかいいようがないのだが、神学的には深淵な議論の対象であるらしい。近年のものでは、関根清三編『アブラハムのイサク献供物語』（日本キリスト教団出版局）があり、この話がいかに哲学的・神学的な奥行きを抱えた問題であるかが論じられている。中丸氏の本は、不合理は不合理のままの紹介に徹しているから、むしろ素直に読むことができる。

いずれにしても、ヨーロッパ文明の底流にあるキリスト教の信仰、その根幹となる『聖書』の内容を簡便に知るのに、この本はまことに打って付けであるように思う。ぜひご一読を。

中庸において考え続けること

国際政治経済学部　国際政治経済学科　専任講師　手賀　裕輔

E. H. カー『危機の二十年』（岩波書店、2011年）
中江兆民『三酔人経綸問答』（光文社、2014年）

このエッセイでは、国際政治に関する二冊の古典を紹介したい。一読してもすべての内容は分からないかもしれないが、その代わりに何度読んでもその度に何かしら得るところがある著作であり、国際政治や外交に関心のある人には是非手に取ってもらいたい。

一冊目は、『危機の二十年』である。これはイギリスの外交官であり、国際政治学者でもあったE. H. カーの代表的著作の一つである。タイトルにもなっている「危機の二十年」とは、第一次世界大戦が終わった1919年から第二次世界大戦が始まる1939年にかけての時期、いわゆる戦間期の二十年を指す。この時、人々は未曾有の世界大戦を経験し、その惨禍を繰り返さないために新たな国際秩序を作り出そうと奮闘していた。

しかしながら、後世を生きる我々はこの時代の人々の試みが失敗し、さらに大規模で悲惨な第二次世界大戦が起こったことを知っている。同時代を生きたカーは、本書で、第一次世界大戦後の国際秩序、すなわちヴェルサイユ体制が抱える問題点を考察している。カーによれば、軍事力を重視した勢力均衡に基づいて平和と安定を保つという従来の考え方を否定する点に、ヴェルサイユ体制の特質があった。そして勢力均衡に代わる平和実現のための手段が、国際連盟による集団安全保障であったのである。しかし、このメカニズムは機能せず、世界大戦は再び起きてしまう。

カーはその原因として、政治家や一般の人々が平和や普遍的正義を掲げるばかりで、権力や軍事力が国際政治において果たす重要な役割から目を背けた偽善性を批判する。確かに平和や正義は重要であるが、それらを権力政治と切り離すことはできないし、軍事力の裏付けのない平和や正義は長続きしないというのがカーの主張であった。ただし注意すべきは、カーが単純に軍事力さえあれば平和な国際秩序が生まれる、と考えていたわけではなかったことである。人間は理想や正義を否定して生きていくことはできず、現実と理想の間で思考し続けることこそが平和実現のために必要であることをカーは本書で力説している。

つづく二冊目の『三酔人経綸問答』は明治時代の思想家、政治家の中江兆民の著作である。中江兆民は、自由民権運動の理論的指導者として活躍した人物であり、二松学舎で学んだ経験も持つ。この『三酔人経綸問答』は、洋学紳士君と豪傑君が南海先生を訪れ、酒を酌み交わしながら日本のあるべき外交について語り合うという形式をとっている。

洋学紳士君と豪傑君は非常に対照的な考えを持っている。洋学紳士君は、自由・平等・友愛といった理想主義的な価値観に則り、軍事力の否定と絶対的な平和主義を主張し、他方で、豪傑君は、国際政治は暴力が支配する弱肉強食の世界であり、強大な軍事力を持つことこそが肝要と考える。当然ながらこの二人の議論は真っ向から対立する。

両者は高名な学者である南海先生が独自の妙案を持っているのではないかと尋ねる。しかし、二人の意に反して、南海先生の考えは「子どもや使い走り」でも知っているような陳腐なものであり、「思わず笑って」しまうものであった。南海先生の意見とは、各国との友好を重んじ、武力については緊急事態以外には用いないようにする、という平凡なものであったからである。

時代を問わず、外交や安全保障に関する議論では、人間はとかく極端な意見に走りやすい。極端な立場は分かりやすいし、不満だらけの現状を劇的に変えてくれるかのように錯覚させてくれる。こうした立場から見れば、南海先生やカーの立場は、守旧的で凡庸な発想と映るかもしれない。しかし、多様な考え方を吸収し、極端な立場や思想には走らず、中庸において考え続けることは果たして守旧的で凡庸であるだろうか。もちろん、人間は永遠に考え続けているわけにはいかず、何らかの決断を下さなければならない。しかしながら、短絡的に極端な考えに飛びつき、自分とは異なる意見を蔑視し、排除するという立場こそ、思考停止であり知的怠惰ではないだろうか。皆さんには、是非大学生活で、多様な考え方に触れ、考え続ける貴重な時間を持ってもらいたい。そのための有益な材料を以上の二冊は提供してくれるように思う。

『外国語の水曜日 ー学習法としての言語学入門ー』 黒田龍之助 著（現代書館）

国際政治経済学部　国際政治経済学科　特任講師（英語）　西川　雅子（Masako Nishikawa-Van Eester）

外国語学習者に、そして特に大学生にお勧めしたい本である。一昔以上前に求め（2000年出版）、折りに触れそこここを摘み食いのように読む、お気に入りの一冊なのだが、現在も人気があるらしく、アマゾンに飛ぶとレビューが寄せられており、星も付いている。

帯には、「いつもこころに文法を」（!）とある。そう、言語を習得する上で文法はなくてはならない（と、語学教師の端くれである私は信じている）。でも実際は、「文法」と聞いた途端に、げんなりされたり、しかめっ面されたり、果ては、こいつのせいでいつまで経っても話せないんだ、などと責められる。文法は嫌われ者なのである。これについてはさらに後述する。

本書の執筆時、著者は理系大学で、つまり語学を専門としてはいない学生を対象に、第二外国語としてロシア語を教えておられた。大学で、英語を専門としない学生に英語を教えている私は、この状況に勝手に親近感を抱いている。他に専攻としてきちんと修めなければいけない学問分野があって、その上に英語を学ばなくてはいけないなんて、大変だなあ、と実は私も思っている。

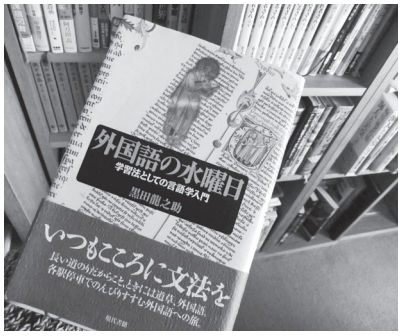
しかし、だからこそ、私は真剣に、皆さんの英語学習の手助けがしたいと願っているし、なぜ英語を学ぶことが重要なのか、考えてもらいたい。そこのところに得心が行けば、無味乾燥・意味不明のように感じられ、苦手な者にはちんぷんかんぷんで、つまらない英語の授業にも、違った角度からの面白さが学習者の目前に、ふいに現れるような気がする。

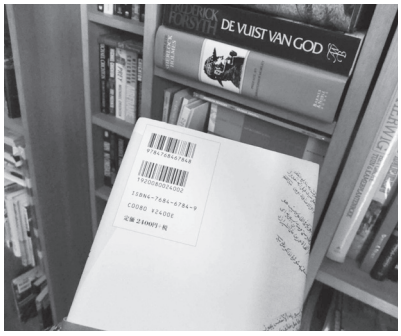
最初は著者とその教え子たちの愉快なエピソードを微笑ましく読んでいくのだが、そのうちに全編を通して、大学における外国語学習の意義、外国語学習で特に大切なこと、せめて日常会話「ぐらい」は …という幻想、学習法としての言語学、外国語学習は幼い時から始めないとだめなのか（これは「言語習得における臨界期仮説 – Critical Period Hypothesis」という、私自身が関わりを持つ研究分野なのだが）など、数々のテーマに引きずり込まれ、読み進みながら考えさせられていくこととなる。そして、そうやって深く静かに考えたことは、きっと読者のためになるはずだ。

さて、「日常会話という幻想」の章で、著者は文法についてこのように述べている。例えば日本語のネイティブであるあなたは、友人とおしゃべりする中で、「あらゆる活用形や構文を使い、複雑な文を作っているはずだ。」つまり、日常会話ができるためには文法は一通りできなければいけないのだ。「日常会話をナメテはいけない。」（先生、私もそう思います!）

ここからは私の意見だが、文法は教室で丸暗記（憶える）すべき厄介な規則などではなく、私たちの生活に根付いた、生きていく上でどうしても習得（覚える）すべき大事なお約束なのだ。それは、教室の中だけの絵空事なんかではなく、毎日の生活に直結し、生きているものなので、いったんそのように捉えれば案外面白くなってきて、実体験に結びつければ興味も湧くのではないだろうか。文法は、毛嫌いしないでなんとか折り合いをつけて仲良くできれば、こんなに頼もしい味方はいない、と考えるのだ。

黒田先生の研究室にやってくる学生たちの姿やその時の光景を想像しながら、先生のお話に耳を傾け、楽しんでいただきたい、味わい深い一冊である。





「自宅書斎にて」

新スタッフ紹介

九段・柏両図書館に
新しいスタッフが参りました。
ひと言ご挨拶を
させていただきます。

市地　英（九段）

図書館の魅力の一つは、大きな辞書やデータベースが使えること。

調べ事のご案内が出来るよう頑張ります。

柴田　ゆかり（柏）

４月から柏図書館にて勤務しています。

一日も早く皆さんの学習のお役にたてるよう頑張ります。

ぜひ柏図書館にお越しください。

山崎　和正（九段）

笑顔をモットーに、皆さんが使いたいと思える図書館を目指してがんばりますので、是非ご利用ください。

○新しいデータベースのご紹介

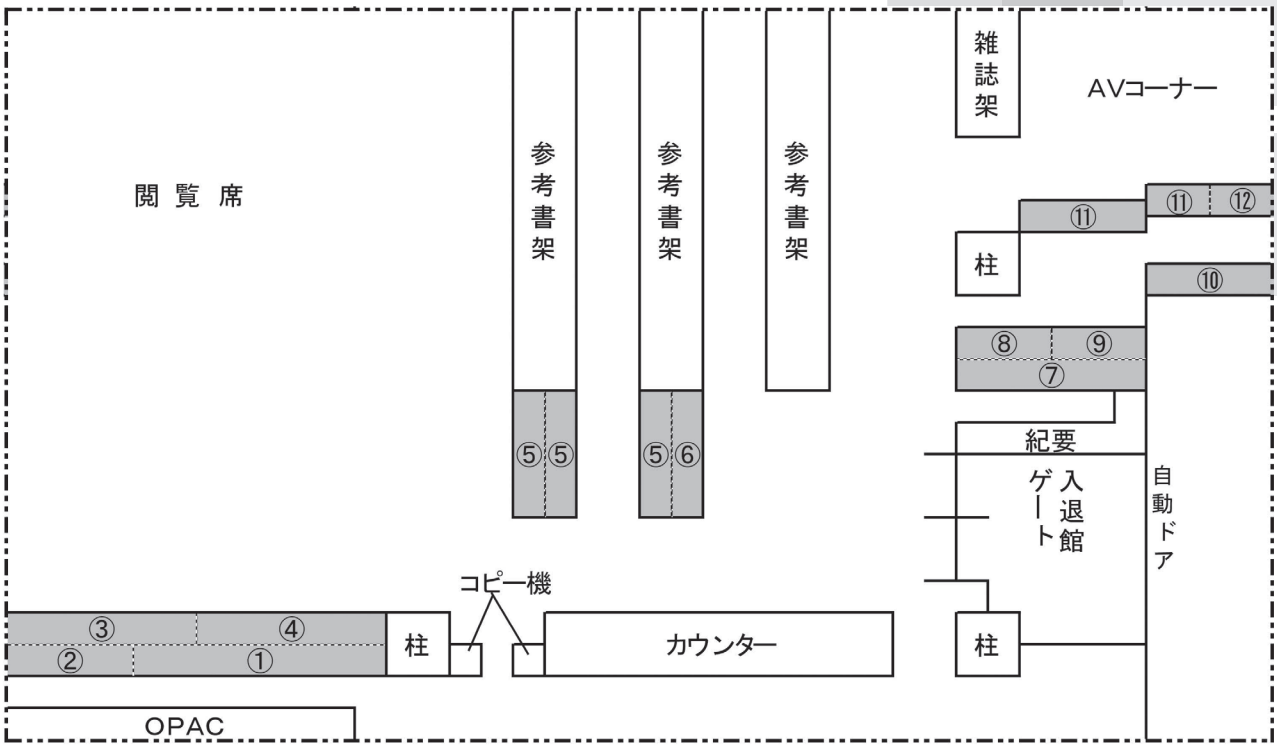
４月より新しいデータベースが、図書館ホームページより使用できるようになりました。それは中国学術オンラインサービス（CNKI）です。正確にいいますと、そのコンテンツの中の一つ中国学術雑誌（CAJ）、さらにその中の文学・歴史・哲学分野が集められた「文史哲輯」が利用できます。こう書きますと、たったそれだけとお思いになるかも知れませんが、CAJ は中国で発行される重要な雑誌 9,700 余誌を対象としており、1994 年以降の 3,700 万件以上の文献を収録しており、さらに毎年約 300 万件が追加されるというものです。

試しに「論語」（日本の漢字で）と入力して検索をかけたところ、13,565 件がヒットしました（中国語で検索すると 20,896 件がヒット、2014 年 6 月 9 日現在）。ただし、これがすべてダウンロードできるわけではありません。1993 年以前の文献や、「文史哲輯」に含まれない雑誌はその場で入手することはできません（ダウンロードできるものは、番号の横の矢印が緑色になっています）。しかし、検索結果の一覧にはタイトル・作者・雑誌名・発表時期が掲載されています。その情報源から、学内外へ文献複写を依頼することができます。

中国学術雑誌に限られはしますが、それでも中国の論文を検索するに際し、大きな手助けとなるデータベースが加わったことは間違いありません。検索結果が膨大になってしまわないよう、絞り込んで検索をすれば目指す論文を見つけられるでしょう。このような CNKI を使わないのはもったいないです。学内のパソコンからアクセス可能ですので、ぜひ活用して下さい。最後に利用が終わったら退出（ログアウト）するのをお忘れなく。

「文庫・新書架」はどこにある？

ＯＰＡＣで検索をしたら、配架場所が「Ｂ１文庫・新書架（九段）」と出ました。ところが、本図書館では「文庫・新書架」が点在しています。ですが、Ｂ１・Ｂ２のＯＰＡＣの近くには、図書館ＭＡＰが貼ってあるので、そちらをご覧いただければ大丈夫。のはずなのですが、なかなか目指す資料が見つからない方も多いようで、カウンターへ本の所在を尋ねに来られます。そこで、現状の配置状況をもとに簡単な図を作成して書架に番号を振り、下に各番号に何があるのかを示してみました。スムーズな書籍探しの一助になることを願います。（なお、この配置状況は 2014 年 6 月現在のものです。配架位置が変更になることもございます。）



①中公新書［081-C］、新典社新書［081-SS］、コレクション日本歌人選［911.102-K］、河出ブックス［081-KW］
②岩波現代文庫［080-IG］
③岩波新書［分類別］
④岩波文庫［080-IB］
⑤講談社学術文庫［080-K］
⑥展示コーナー（年に数回、企画展示が行われます。普段別の場所に配架されている図書は、備考欄に「B1 文庫・新書架（九段）」）と提示されます。）
⑦講談社文芸文庫［080-KB］
⑧手塚治虫文庫［726.1-TO］
⑨京都書院アーツコレクション［分類別］、グインサーガ［913.6-G］
⑩エンタメコーナー（百年文庫やエンタメの書籍があります。）［分類別］
⑪東洋文庫［222-TH］
⑫受賞作コーナー（芥川賞、直木賞などの受賞作品があります。）［913.6］
※［　］内は請求記号

図書館だより

図書館カレンダー　開館日・開館時間は変更することがあります。詳しくは図書館ホームページをご覧ください。

九段図書館

7月

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

8:40～21:50
9:00～16:50
閉館

8月

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31						

8:40～21:50
9:00～16:50
9:00～19:00
閉館

9月

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30				

8:40～21:50
9:00～16:50
9:00～19:00
閉館

10月

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

8:40～21:50
9:00～16:50
閉館

柏図書館

7月

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

9:15～16:30
閉館

8月

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31						

9:15～16:30
閉館

9月

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30				

9:15～16:30
閉館

10月

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

9:15～16:30
閉館

※8/18（月）～22（金）、25（月）～29（金）、9/1（月）～9/5（金）は、レイトデー（九段）。
※9/15（月）は授業開講のため開館（九段）。
※10/10（金）は、創立記念日のため閉館（九段、柏）。
※10/13（月）は授業開講のため開館（九段）。

編集後記

季報89号をお届けします。今号では新しく本学に赴任された先生方に執筆をお願いしました。お引き受けいただいた各先生に御礼申し上げます。内容も新スタッフ紹介、新データベース紹介、表紙も新たに模様替えと、「新」ものづくしの号となりました。ご一読いただければ幸いです。

（S・A）

二松学舎大学附属図書館
季　報
第89号
発行日　平成26（2014）年7月1日
発　行　二松学舎大学附属図書館
九段図書館　〒102-8336　東京都千代田区三番町6-16
電話：03-3263-6364
柏 図 書 館　〒277-8585　千葉県柏市大井2590
電話：04-7191-8758
印刷所　株式会社 サンセイ
電話：03-5227-8333